

# 神が住まう 美しき信仰の地

大津市街地で生まれ育った私にとって、びわ湖の対岸に見える三上山は幼いころから身近な存在でした。標高は432mと決して高く険しい山ではないのですが、周囲に目立った山がないこともあって、その秀麗な円錐形の山容はひととき目につきました。「近江富士」と称されていることも納得できます。

この三上山は神の住まう「神体山」として古くから信仰の対象となってきました。山の西麓には、アメノミカゲ神をまつる御上神社が鎮座しています。この御上神社の祭神については、奈良時代に編纂された『古事記』開化天皇段に「近つ淡海の御上祝がもちいつく天之御影神」という記載があることから、この信仰が古代に遡ることは明らかです。

さて、日本古代の信仰形態の一つに山に対する信仰があります。神は通常は人里に住まずに清浄な山奥に籠っており、祭事のたびに山から人里の祭場へお迎えするのです。そのため、神の籠る山（神体

山）が信仰の対象となりました。こうした祭場は臨時的なものでしたが、そのうちに祭殿などの恒常的な施設が設けられ、神社が成立することになります。御上神社の場合

も、当初三上山に住まう神を麓にお迎えした臨時的な祭場からしだいに発展していったことが考えられます。その時期についてはよくわかっていないのですが、社殿や宝物の時期からみると、少なくとも平安時代後期から鎌倉時代初期には社殿の整備がなされていたようです。

さらに、奈良時代末に編集された仏教説話集『日本霊異記』の中には、「近江野洲郡の部内の御上嶺に神社あり」とする説話や、宝龜年中（770-781年）に三上山の社近くの堂で修行していた奈良大安寺僧惠勝が東天竺国の大王の生まれ変わりである白猿から法華経を読むように頼

まれた説話など、三上山周辺を舞台とした説話がありま

す。これらの「神社」「社」が、現在の御上神社であるかどうかについては今後検討が必要ですが、少なくとも奈良

時代の終わりころには三上山周辺に社殿が建立されていたと

考えてよいでしょう。この説話の中で、奈良大安寺の僧が三上山の社近くの堂

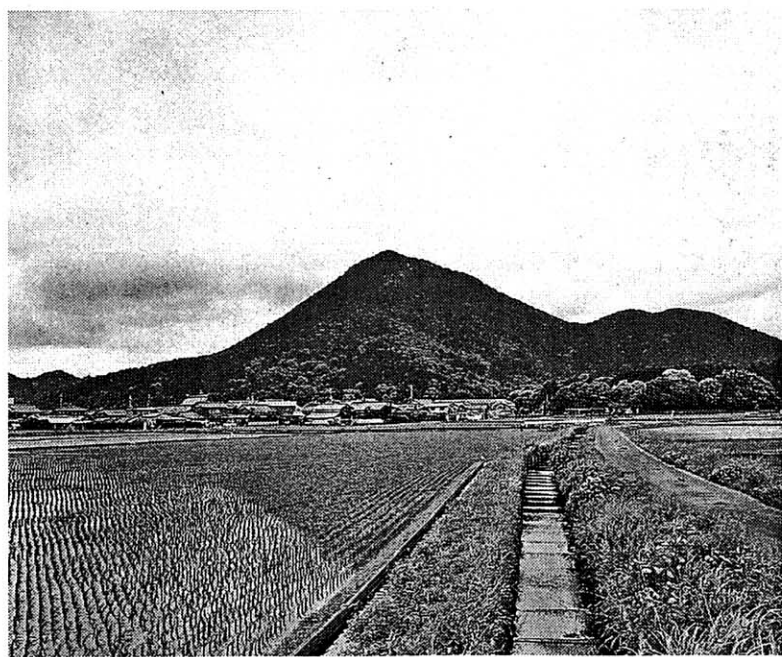
で修行していたことからわかるように、三上山周辺は神

仏習合の信仰地でもありました。御上神社の本地仏は阿彌陀如来とされ、三上山山麓一帯には古代から中世にかけて

の大修行していたことからわかるように、三上山周辺は神

の大修行していたことからわかるように、三上山周辺は神

三上山



このように、三上山は人と神との長い歴史をもつ美しい山です。その歴史と美しい姿を後々まで伝えていきたいものです。（財団法人滋賀県文化財保護協会 辻川哲朗）